

# 平邑方言における 近代漢語語気助詞「也」の変遷について

孟 子敏

## 1. はじめに

言語的コミュニケーションにおいて、一方の話者の発話は、語句の組み合わせによる意味以外に、聞き手に向かって自己の主観的態度を伝達する必要がある。この主観的態度とは本稿に言うところの語気である。一般的に言うところの平叙、疑問、使役、感嘆などの機能は、とりもなおさずこの語気を指すのである。

太田辰夫(1958)は、文の機能を論ずるに際して、「無要求文」と「要求文」という2種に分けて、極めて有意義な分析を行なった。我々の理解するところによれば、「無要求文」は、話者も勝手に発話を行い、聞き手も特定の発話に対する聞き手である態度をとらず、発話を聞くか聞かないかは完全に聞き手個人の自由に属するのである。聞き手(読み手)の受信態度を確認する手立てを欠くが故に、テレビ放送のニュースや報道における文は「無要求文」に属するのである。アナウンサーや報道する人間は、聞き手に対して自分の発話に対する特定の反応を示すことを期待も要求もしないし、聞き手も何らの反応を示す必要がないのである。聞き手がもし強いてその発話者とコミュニケーションを図ろうとするならば、発話者の発話行為を中断しなければならず、そのようなことをするならば、その行為は甚だ礼を欠くものとならざるを得ない。もちろん、そのようなことはある状況下で起こり得るのであるが。

「要求文」はそれとは正反対であり、発話者の発話に対して、聞き手は必ず具体的反応を示さなければならず、話者によるチェックが不可避であるが故に、聞き手は反応するかどうかという点において個人的自由をもっていないのである。聞き手がもし、反応しないという態度を強いて取るならば、極めて異常な状況を産み出すこととなる。もちろん、このようなことはある状況下にお

いて起こり得るものであるが。

「無要求文」および「要求文」とコミュニケーションとの関係については、太田辰夫は特に述べていないが、本論文で言うところの語気とは、言語的コミュニケーションの中で始めて出現するものであるから、以下の行文において、筆者がすでに提起した「非交流文」と「交流文」(孟子敏 2005)という2つの概念を引き続き使用することとする。また、孟子敏(2005)が「交流文」に対して分類した「伝事語気」・「伝問語気」・「伝疑語気」という語気の骨組みは本論文でも有効である。

## 2. 近代漢語における語気助詞「也」

### 2.1 語気助詞について

漢語の語気助詞は長い歴史を有しており、その歴史は漢語史と同じ長さを有すると言える。漢語学史上、語気助詞を専門にあつかったのは元の盧以緯の『語助』が最も早く、この本はその後流伝の過程で『助語辞』と呼ばれるようになった。その命名より、語気助詞が言語表現を助けるカテゴリーであることが見て取れるであろう。語気助詞は、現在もっともよく用いられているのは、語気詞という呼び方である。語気詞について劉勳寧(1990)は、優れた分析を行っており、「語気詞は漢語においてとりわけ重要なものである。その使用は、対話に参加する双方の関係および発話者の関係する事物に対する態度などに深く関わる。」語気詞に対する通常よく見られる説明は語気を表す語であると言うものである。疑問を表すものとしては、「嗎、呢、吧、啊」などがあり、使役を表すものとしては、「吧、啊」などがあり、平叙を表すものとしては、「了、啊、呢」などがあると言うものである。しかし、いわゆる語気詞は本質的に語気を表すものではなく、本論文で用いられる「語気助詞」は、伝事、伝疑および伝問の語気を強化するのである。それは話者自身の主観的態度の強化を意味するのである。これは語気助詞の根本的機能であると考えられる(孟子敏 2005)。

### 2.2 語気助詞「也」の意味

#### 2.2.1 語気助詞「也」は「已然」もしくは「将然」とは関係がない

漢語史において、語気助詞「也」は至る所で見られる常用語である。いわゆる文言における「也」は、唐の柳宗元の解釈では「決辞也」と、元の盧以緯の解釈では「是句意結絶処」と言う。本論文の分析では、差し当たって文言の「也」は対象とせず、近代漢語の語料に見られるものを重点的に扱うこととす

る。

近代漢語における「也」の意味については、多くの研究者の見解は大同小異である。太田辰夫は、「也」を動作もしくは状態の実現を表し、動作の完了を表すと見(太田辰夫 1958)、また、称呼の後にも置かれ、疑問の語気を強調したる付け加えたりする場合に用いられるとも見ている(太田辰夫1958)。羅驥は、さらに或る事実がすでに過去のものもしくは完成したものとなっていることや、或る事実が間もなく発生することをも表すと見(羅驥1994)、孫錫信も、すでに変動する、もしくは「将然」であることをも表すと見ている(孫錫信 1999)。一般的には「也」は、やはり判断を表すと見られていることは周知のことである。

「也」ははたして「已然」もしくは「将然」の動作あるいは事実を表すことができるのであろうか。それは無理である。動作あるいは事実の「已然」もしくは「将然」(実際にはさらに動作あるいは事実の「正然」を表す用法もある)は、言語的環境およびセンテンス中の語彙的組み合わせによって表されるものであって、「也」によってであるわけではないのである。時間の概念の角度より見るならば、人は時間を過去・現在・未来に分割し、いかなる発話においてもその3つの「時」のうち1つが選ばれるが(言語を異にすれば、当然時間概念の表現方法は異なるが)、センテンス中の語は特定の「時」に分析されることはない(時点を表す語は自由に使用される)。例えば、「他去北京了」において、「他去北京」中の「他、去、北京」は、それぞれ以前の、もしくは以後のものとの標示はなしえないのである。現実の「北京」は日々変容を遂げ続けて行くとは言え、語彙としての「北京」は、昔も今も、そしてこれからも変わらないのである。「也」を含むセンテンスも当然それと同様であるのである。「也」が任意の「時」において使用可能である以上、「時」のカテゴリーにおいて「也」をさらに分析すると言うのは全く意味のないことである。

「已然」もしくは「将然」を表すセンテンスで「也」を含むものから、「也」を取り去って見ても、「已然」もしくは「将然」の意味は依然として表現されている。例文を見てみよう。

- (1) 已被冷晴人觀破也。(『景德伝灯録』)
- (2) 碍甚事，這店里都閉了門子也，待有甚么人入來？(『老乞大』)
- (3) 才生心動念，早不本分了也。(『圓悟佛果禪師語録』)
- (4) 那般呵，俺明日早則放心的去也。(『老乞大』)

(5) 霞云：“若踏倒則不來也。”（『圓悟佛果禪師語錄』）

「也」を取り去っても、例(1)、(2)および(3)では、依然として「已然」を表しており、例(4)および(5)では、依然として「將然」を表しているのである。その他に、「也」を伴うセンテンスで「已然」を表すと見られているものがあるが、その解釈は実際には誤解に属するものである。例えば、

(6) 你来也，你邀过馬來，在一处者，容易照觀。月黑也，恐怕迷失走了悞了路子。明星高也，天道待明去也。咱每赶將馬去來，到下处，收拾了行李時，恰明也。這馬每都絳住者，教那两个起來。（『老乞大』）

ここでの「你来也」と「月黑也」は、「你來了」や「月黑了」の意味ではない。この発話は2人の人物が夜に馬の世話をしているときのものである。「你来也」は、「你」を呼び寄せる意味で、「月黑了」は、聴き手に現在は月が隠れていると言うことを伝えているものであり、「不黒」から「黒」への「已然」変化を意味しているものではない。このような表現は、中原官話では現在でも保たれている。

## 2.2.2 「也」の出現する言語環境および意味

「也」は「已然」もしくは「將然」を表さないとすれば、その表す意味はいったい何であろうか。この問題はやはり「也」が出現する言語的環境を観察する必要があるであろう。「也」の置かれる位置は一般にはセンテンス末尾であり、我々の考察によって明らかな通り、「也」が出現する言語的環境は常に「交流文」であり、また、語気の面では、「伝事」、「伝問」、「伝疑」のいずれにおいても「也」は使いうる。

### 2.2.2.1 「也」が出現する交流文

ここではとりあえず伝事語気を表す交流文を問い扱う。交流文には以下のような2つのケースがある。

1つは、実際に対話が行われている交流文であり、コミュニケーションが発話者と聴き手との間で展開されているものである。例えば、

(7) 五嫂因起謝曰：“新婦曾聞：線因針而達，不因針而總；女因媒而嫁，不因媒而親。新婦向來專心為勾當，已后之事，不敢預知。娘子安穩，新婦向房卧去也。”（『游仙窟』）

(8) 洁云：都到方丈吃茶(做到科)。

末云：小生更衣咱。(末出科云)那小娘子已定出来也，我只在這里等待問他咱。（『西廂記』）

(9) 刽子云：快行動些，誤了時辰也。(『感天動地竇娥冤』)

(10) (刽子做喝科)云：兀那婆子靠後，時辰到了也。

(11) 婆子道：“貧道喚做聖姑姑，若老爺有請我時，向東南方叫聖姑姑三聲，貧道即便來也。”(『三遂平妖傳』)

もう1つは、実際に対話が行われている交流文ではなく、コミュニケーションは発話者と聴き手との間で行われておらず、発話者の独り言の形、もしくは発話者本人がまだ人が知らない話題についてわざと勿体をつけた形でかたり、自ら答えるというものである。例を見てみよう。

(12) (下)賽盧医云：可不悔氣！剛剛討藥的這人，就是救那婆子的。我今日與了他這服毒藥去了，以後事發，越越要連累我；趁早兒关上藥舖，到涿州賣老鼠藥去也。(『感天動地竇娥冤』)

(13) 忽一彪軍撞至面前，大叫：「魏延在此！」拈弓搭箭，射中曹操。操翻身落馬。延棄弓綽刀，驟馬上山坡來殺曹操。刺斜里閃出一將，大叫：「休傷吾主！」視之，乃龐德也。(『三國演義』)

「也」を伴うこれらのセンテンスは、話者が或る新たな事柄もしくは状態を伝えているものであり、「也」を取り除くとニュートラルな平叙文となる。しかし、一旦「也」を伴うと陳述の語気を特に伝達することとなり(劉勳寧1990)、話者の語気は強化される。したがって、「也」の機能は強化することにあるのである。

### 2.2.2.2 伝事、伝問、伝疑語気文中の「也」

① 伝事語気文。2.2.2.1において掲げたのは全て伝事語気文である。以下に若干の例を補充してみる。

(14) (正旦持湯上)云：……有俺婆婆不快，想羊肚湯吃，我親自安排了与婆婆吃去。婆婆也，我這寡婦人家，凡事要避些嫌疑，怎好收留那張驴兒父子两个？非親非眷的，一家兒同住，豈不惹外人談議？婆婆也，你莫要背地里許了他親事，連我也累做不清不潔的。我想這婦人心好難保也呵。(『感天動地竇娥冤』)

(15) 卜兒云：孩兒也，你說的豈不是？……不知他怎生知道我家裏有个媳婦兒，道我婆媳婦又沒老公，他爺兒两个又沒老婆，正是天緣天對。若不隨順他，依旧要勒死我。那時节我就慌張了，莫說自己許了他，連你也許了他。兒也，這也是出于無奈。(感天動地竇娥冤)

(16) 天地也，做得个怕硬欺軟，却元來也這般順水推船。地也，你不分好歹

何為地。天也，你錯勘賢愚枉做天！哎，只落得兩泪涟涟。(『感天動地竇娥冤』)

(17) 竇天章云：好孝順的兒也。(『感天動地竇娥冤』)

上の例(14)～(17)は、呼びかけの語に「也」が後置され、強烈な呼びかけの語気が伝達され、もし「也」がないならば、極くニュートラルな呼びかけとなり、センテンスは単なる平叙文となってしまう。

## ② 伝問語気文中の「也」

(18) 余問曰：“此誰家舍也？”

女子答曰：“此是崔女郎之舍耳。”

余問曰：“崔女郎何人也？”(『游仙窟』)

(19) (刽子做磨旗科)云:怎么这一会见天色陰了也？(『感天動地竇娥冤』)

(20) (西門庆)便問道：“你那日来家怎的不好也？”(『金瓶梅詞話』)

(21) (小生笑介)說的有理。(指介)你看天才午轉，几時等到点燈也？(『桃花扇』)

(22) (浄)在下出門之時，香君說道，千愁万苦俱在扇頭，就把扇兒当封書罷！

故此寄来的。(生又看，哭介)香君香君！叫小生怎生報你也？(『桃花扇』)

これらの例には、いずれも疑問代名詞が使われており、それだけで伝問の機能は備えてはいるが、一般的な質問でしか過ぎないと言える。「也」を用いることによって、発話者の知ろうとする態度もしくは全く理解できないという態度を際立たせることができるようになるのである。例えば、例(20)では、「也」は西門慶の新たに知り合った遊女李桂姐に対する関心を明確に示しており、例(19)は、竇娥が刑の執行をうけるときの様子を示しているが、執行の前、竇娥が「大人，如今是三伏天道，若竇娥委实冤枉，身死之后，天降三尺瑞雪，遮掩了竇娥尸首」と言ったところ、死刑執行人はそれは当然不可能なことであると思い、「這等三伏天道，你便有冲天的怨氣，也召不得一片雪来，可不胡說」と言ったのである。ちょうどこの時、空はにわかには曇り、冷ややかな風が強く吹き始めたので、死刑執行人は強烈な不可解な気持ちを表すために「也」を用い、「怎么这一会见天色陰了也」と言い、そのあと間を置かず伝事語気を強めた「好冷風也」というセリフを続けたのである。

## ③ 伝疑語気文中の「也」

(23) 馬敢吃了草也?飲去来。(『老乞大』)

(24) 紅云：姐姐，你看月闌，明日敢有風也？

旦云：風月天邊有，人間好事無。（『西廂記』）

(25) 孤云：你招也不招？（『感天動地竇娥冤』）

(26) 監斬官云：這死罪必有冤枉，早兩桩兒應驗了，不知亢旱三年的說話，准也不准？（『感天動地竇娥冤』）

(27) 員外真个走進房里，陪著笑道：“我兒！爹爹問你則个，册兒上變錢米的方法，你記得也不記得？”（『三遂平妖傳』）

例(23)は、発話者は馬が草を食べたかどうか確認を行うものであり、「也」を用いて強調しており、例(24)は、鶯鶯が張君瑞との間を夫人によって無理やり分けられ、会うこともままならなくなり、憤懣やるかたない状態の時に、紅娘が鶯鶯に言ったものである。そのとき、紅娘は鶯鶯が張君瑞と密会できるよう計らい、意図してこのような語気を強めた言い方をして、鶯鶯の慕る想いをいや増しにしたのである。

例(25)、(26)、(27)はいずれも選択疑問であり、前半の部分と後半の否定形式との並列によって、伝疑語気を表現しているものである。前半の部分には「也」が伴い、語気が強化されており、後半は否定形式である。この種の伝疑語気文は、実際には2つの文により構成されているものなのである(劉勳寧1985)。この点に関しては、ここで特に指摘しなければならないことがある。これまで検討を加えた語料から見れば、現代漢語における「X不X」という疑問形式に相当するものは、元曲や『老乞大』や明初の『三遂平妖傳』などでは、「X+語気詞+不X」であり(語気詞は「也」、「那」および「也那」である)、「X不X」ではなかったのである。それらの文献に見られる「X不X」は、直接疑問を伝達するものではなく、ショートフレーズとして文の1構成要素となっているものなのである。『三遂平妖傳』に見られる恰好の例を見てみよう。

(28) 只見林子里走出胡永兒來，看著那廝道：“哥哥！昨夜罪过，你帶挈我客店里歇了一夜，你却如何道我是鬼。今番青天白日里，看奴家是鬼不是鬼。”（『三遂平妖傳』）

(29) 東鄰的朱大伯聞著這句話，暗想道：“菜園里那有什么孩子捨得？莫不是鵝蛋中抱出來的這個怪物……我如今只說少了麥種，與他借些麥子做種，只當提醒他一般，料他也難回我。順便就去看那孩子是什麼模樣，是那怪物也不是？”（『三遂平妖傳』）

以上2つの例により、「也」を含むものは2つの文であり、「也」を含まないも

のは「X不X」のショートフレーズであることが見て取れ、また、「也」を含むものは交流文であり、「也」を含まない「X不X」は交流文における1構成要素であることも理解される。このことは、現代漢語方言における疑問を表す「X不X」の分析に際しても非常に重要であろう。

### 2.2.2.3 或る極端な用例の分析

「也」に関して、『三遂平妖伝』に見える傻子憨哥の次の発話は非常に興味深い。

(30) 忽一日、永児道：“我們好去乘涼也。” 憨哥道：“我們好去乘涼也。”

伝問語気文に対する聴き手の反応は問いに対する返事であるべきであり、伝疑語気文に対する聴き手の反応は疑問に対する返事であるべきであり、伝事語気文に対する聴き手の反応は事柄を了解したということである。たとえば、「我們明天去動物園玩」との発話者の言葉に対して、聴き手は「我們明天去動物園玩」と言える。しかし、次の例は成立しえない。

(31) A：我們明天去動物園玩呀！

B：\*我們明天去動物園玩呀！

これに対して、我々は、語気詞「呀」を伴った場合、聴き手に新たな情報を了解させるために伝事語気を強化するものと解釈する。聴き手は、発話者に対して了解したかどうかを伝えることができるのみであり(言語だけでなく、ゼスチャー等でも伝えることができる)、自分が了解した情報を語気詞を帯びることによって伝事語気を強めて発話者に伝えることはできないのである。もし、そうしなければ頭がおかしいともなされてしまう。例えば(30)の例における憨哥のようであり、あるいは故意にそうしていることともなろう。

このことは、「也」の強調する機能を別な面から証明したこととなる。

以上をまとめると、「也」の意味は語気を強化するという一点に集約することができる。以下のように、図示することができよう。



### 3. 「也」の変遷

#### 3.1 先行研究

「也」の語史上の使われ方については、すでに優れた検討が加えられている。劉勳寧(1985)は「了也」について、「了也」が合体して今日の「了」となったと考えている。佐藤晴彦(2002)は『老乞大』の各種版本の検討を通して、「了也」中の「也」は当時まだ不安定な状態にあり、現れたり現れなかったりすると指摘している。また、いわゆる已然もしくは将然を表す「也」は後に「了」に取って代わられたと考える説もある(羅驥1994、竹越孝2002)。

「取って代わった」という説に関してはここで指摘しなければならないことがある。1つの言語もしくは方言の体系内部に限定した場合、すなわち共時的には、「取って代わった」という現象は起こりうるべくもないことである。通時的な観点からするならば、音声・音韻、文法、語彙において「取って代わる」現象を指摘する場合、それは外的要因によるものであり、他のより威信ある言語もしくは方言からの借用により痕跡を留めているものなのであり、共時的体系内部に起きた発展ではないのである。

時には、新しい成分が古くからあるもの取って代わることがあり、それは古くからあるものが担ってきた意味を表しにくくなったことによるものである。しかし、取って代わられた後、語気とか語感などの面で以前と全く変化がないというわけではない。実際の例を見てみよう。最近読んだ豊子愷の作品だが、描かれているのは前世紀三、四十年代である。その中に、「忽然，猛烈の一声‘砰’，炸弹丢在离洞口不远的地方，一股热風帶了沙尘冲进洞口」という一節があり、「帶了」は現在の極く普通の語感では「帶着」と言うべきところである。しかし、当時においては「帶了」と「帶着」とは同じではなかった。今後、「了」が当時すでに「着」の意味を持ち始めており、その後さらにその傾向が強まり、ついには「着」に取って代わられたのだという説を唱えるものが出てきた場合、それを支持するものが果たしているであろうか。「也」の問題もそれと同じなのである。

「也」の変遷はどのようなプロセスを辿ったのであろうか。ここで、『金瓶梅詞話』を基点として、まず唐代まで遡及し、その後で『金瓶梅詞話』以降の流れに検討を加えてみよう。

#### 3.2 「也」の連続性

以下には伝事語気の例のみを挙げる。「也」を伴う伝事語気センテンスは、

唐以降、明に至るまで、「也」は完全な連続性を保っており、いずれも新たな事実を伝えるために語気を強めているものである。ここで、『金瓶梅詞話』から唐代へ遡って、この連続性を見てみる。唐代は近代漢語が始めての段階と見られる。例をみてみよう。

明代：

- (32) 這們時，我明日早只放心的去也。(『翻譯老乞大』)
- (33) 駝馱都打了也，咱們行着。(『翻譯老乞大』)
- (34) 袁公大喜道：“世上事多半是有名無實，只這個洞名向來亦是虛伝，今日才不枉喚做白云洞也。”(『三遂平妖伝』)
- (35) 張鸞道：“這番少不得貧道行了也。”(『三遂平妖伝』)
- (36) 蔡御史道：“安鳳山他已陞了工部主事，往荊州催償皇木去了。也待好來也。”(『金瓶梅詞話』)
- (37) 王婆道：“……又被那裁縫勒措，只推生活忙，不肯來做。老身說不得這苦也！”(『金瓶梅詞話』)
- (38) 婦人道：“買賣不與道路為讐，只依奴，到家打發了再來也。往後日子多如柳葉兒哩！”(『金瓶梅詞話』)
- (39) 小玉道：“大妗子要茶，我不往後邊替他取茶去。你抱着執壺兒，怎的不見了？敢屁股大吊了心了也，怎的？”(『金瓶梅詞話』)

元代：

- (40) 賽盧医云：誰敢合毒藥與你？這厮好大胆也！(『感天動地竇娥冤』)
- (41) 魂旦云：父親，你将我與了蔡婆婆家，改名做竇娥了也。(『感天動地竇娥冤』)
- (42) 你燒的鍋滾時，下上豆子。但滾的一霎兒，將這切了的草，豆子上蓋覆了，休燒火，氣休教走了，自然熟也。(『老乞大』)
- (43) 那般呵，俺明日早則放心的去也。(『老乞大』)
- (44) 恁牽回這馬去，再牽將別个的來飲，這馬都飲了也。(『老乞大』)
- (45) 卜兒云：孩兒也，再不要說我了，他爺兒两个都在門首等候，事以至此，不若連你也招了女婿罷。(『感天動地竇娥冤』)
- (46) [做哭科]云：婆婆也，直等待雪飛六月，亢旱三年呵，唱：那其間才把你个屈死的冤魂這竇娥顯。(『感天動地竇娥冤』)
- (47) 竇娥也，你這命好苦也呵！(『感天動地竇娥冤』)

- (48) 天地也，做得个怕硬欺軟，却元来也這般順水推船。地也，你不分好歹何為地。天也，你錯勘賢愚枉做天！哎，只落得兩泪漣漣。(『感天動地竇娥冤』)

宋代：

- (49) 霞云：“若踏倒則不來也。”(『圓悟佛果禪師語錄』)  
 (50) 苟得外面物好時，却不知自己身與心却已先不好了也。(『二程語錄』)  
 (51) 行者曰：『我八百歲時，到此中偷桃吃了；至今二万七千歲，不曾來也。』(『大唐三藏取經詩話』)  
 (52) 賊軍廝見，道：“咱性命合休也！”(『董解元西廂記』)

唐代：

- (53) 十娘曰：“向見詩篇，謂非凡俗，今逢玉貌，更勝文章。此是文章窟也！”(『游仙窟』)  
 (54) 十娘咏鞞曰：“数捺皮應緩，頻磨快轉多；渠今拔出后，空鞞欲如何！”  
 五嫂曰：“向來漸漸入深也。”(『游仙窟』)  
 (55) 師云：“吃飯了去也。”(『祖堂集』)  
 (56) 對曰：“吃飯了也。”(『祖堂集』)  
 (57) 師于半夜時叫喚：“賊也！賊也！”(『祖堂集』)

以上の「也」は完全に連続性があり、意味も全く同様である。しかし、いくつかの例における「也」は明代には「了」によって表されるようになったものであり、その意味は「了」と同様ではないかという意見もありうる。この点に関しては、すでに上で述べている。すなわち、新しい成分が古くからあるものにとって代わることがあると言うのは、古くからあるものが担ってきた意味を表しにくくなったことによるものである。しかし、取って代わられた後、語気とか語感などの面で以前と全く変化がないというわけではない。例えば、(42)では、元代の『老乞大』での「自然熟也」が、明代の『翻訳老乞大』で「自然熟了」になっているのである。しかし、「了」に替わったことによって、意味も変化を遂げているのである。「自然熟也」は、飼い葉がそのように処理された後、具えている状態が「熟」であることを強調しているのであり、「自然熟了」は、飼い葉がそのように処理されたことによって、「不熟」から「熟」への変

化を遂げたことを陳述しているのである。これらの用法は、現在の中原官話においては依然用いられつづけている(以下に取り上げる)。この問題は、『翻訳老乞大』の編者がすでに「也」の意味を把握しかねるようになっていたことを示すものと言えるであろう。

### 3.3 「也」の2つの変遷

『金瓶梅詞話』以前、「也」はかなり単純に継承された様相を示す。『金瓶梅詞話』以降、「也」の変遷姿勢は逆に複雑な様相をとるようになる。文献上の資料から見る場合、現在では一般に近代白話の「也」字(「也」字であって「也」という語ではない)は清代の後消滅したと言われる。しかし、実際にはそうではない。文字のレベルで言うならば、「也」の変遷は2つの道を辿ったのである。1つは、一部の方言において消滅したが、もう1つは、一部の方言においては使用され続けているということである(孟子敏 2003)。

#### 3.3.1 「也」の消滅

消滅した道は、北京話に限定されよう。北京話ではほとんど目にする事ができない。白話での「也」の意味は、完全に「呀」もしくは「啊」によって取って代わられている。「也」が用いられているときは、必ず文言的文体に限られる。文康<sup>2)</sup>の『儿女英雄伝』が典型的例となろう。「也」の用例はいずれも文言的文体であり、あるいは直接文言文を引用しているものである。例を見てみよう。

(58) 天尊道：“……這便是今日繡旗齊展，宝鏡高懸，發落這樁公案的本意也。”

(59) 那先生道：“‘尋常’者，對‘英雄豪杰’而言也。”

以上に対して、「呀」とか「啊」を用いたセンテンスは、いずれも自然な、かつ典型的な白話である。例を見てみよう。

(60) 太太道：“老爺，這話又來了！他舅母去，也只好照管个大面皮兒呀，到了小子自己身上的零碎事兒，怎么好惊驚動長輩兒去呢！”

(61) 店主人走后，他便向公子說：“大爺呀！真應了俗語說的：‘一人有福，托帶滿屋。’”

(62) 那鄧九公道：“哦，舅爺面上來的！舅爺到這里，我鄧老九沒敬錯啊！”

(63) 老婆兒聽了，向他女兒道：“聽見了，兒啊？這位姑娘敢是好意！”

「也」のこのような変化はいつ頃始まったのであろうか。語氣助詞「也」の地位が「呀」や「啊」によって揺らぎ始めたのは元代が最も早いであろう。元

の雑劇において、「也」、「呀」、「啊(阿)」(「呀」と「啊」は実際には同一形式の変種である)の3つの語気助詞を表す字は、いずれも出現している。出現頻度は、「也」が高く、「呀」と「啊」は低い。実際の用例から見るならば、「也」は「呀」、「啊」と基本的には相補分布をなしていると言えるが、若干の相違も見出せる。「也」は文末にのみ出現し(例文省略)、文頭での用例はなく、「呀」、「啊」は主には文頭に現れ、文末での用例が少数ある。例を見てみよう。

- (64) 呀。蠢動含靈。皆有佛性。飛将一个蝴蝶来。救出這蝴蝶去了。呀！  
又飛了一个蝴蝶。(『包待制三勘蝴蝶夢』)
- (65) 劄子：天色陰了。呀。下雪了。(『感天動地竇娥冤』)
- (66) 末背云：呀。声息不好了也！  
旦云：呀。俺娘變了卦也！  
紅云：這相思又索害也。(『西廂記』)
- (67) 哎！霸王呀！(『蕭何月夜追韓信雜劇』)
- (68) 孩兒，你撇了俺兩口兒远处充軍去，好下的呀！(『薛仁貴衣錦還鄉記雜劇』)
- (69) 淨做拖盧云：好呀。好呀。你在城外將那婆子要勒死。好的是你來。你只說我不認的你哩。我拖你見官府去。(『感天動地竇娥冤』)
- (70) 旦云：你不知道。這汗衫兒呀，[梧叶兒]他若是和衣臥，便是和我一處宿；但貼着他皮肉，不信不想我溫柔。(『西廂記』)
- (71) (做扶著末科，做尋思科)阿！我自思憶，想我那从你的行為，被這地乱天翻交我做不得精俐。(『閨怨佳人拜月亭雜劇』)
- (72) 做跳牆科云：阿。可綽我跳過這牆來。一所好花園也。(『王閨香夜月四春園』)
- (73) 我是个貧乞道，住在山阿，怎生把你儒生度脫！(『陳季卿悟道竹叶舟雜劇』)
- (74) 王員外云：好阿。兩手鮮血。還不是你里。正是殺人賊。明有清官。我和你見官去來。(『王閨香夜月四春園』)

意味から見れば、文末の「呀」、「啊」と「也」は全く同じである。この点は、実例によって証明できる。閩漢卿の作品では、同様の文脈において「也」と「呀」とが同様に用いられている。例えば例(69)の「好呀」は、別のところでは「好也」となっている。例を見てみよう。

- (75) 淨：好也囉。把我老子藥死了。更待干罷。(『感天動地竇娥冤』)

(76) 周怒云：好也。将紙笔来。写与你一紙休書。你快走。（『趙盼兒風月救風塵』）

『三遂平妖伝』では、「也」と「呀」はやはり互換性がある。例えば、

(77) 衆畜道：“苦也！俺們怎理会得？全仗老公公教導。”

(78) 癩師道：“苦也！佛救我則个！”

(79) 李二嫂出来看見，吃了一惊道：“苦也！苦也！我丈夫如何得下来？”

(80) 媽媽道：“苦呀！我兒先前那几日，有一頓無一頓，這兩日有些柴米，不知飢餓，只顧吃滯了。明日叫爹爹出去贖帖藥吃。”

(81) 卜吉道：“苦呀！苦呀！我命休矣！”

何ゆえこのような取り替え現象が起こりうるのであろうか。意味が同じであることはその条件の1つである。しかし、音韻上の解釈が不可欠であろう。ここで、音韻の面からの検討を少し加えておこう。

也：『広韻』羊者切、馬韻三等。『中原音韻』車遮韻。

呀：『中原音韻』家麻韻。

我々にとって極めて興味深いのは、『中原音韻』正語作詞起例で発音の違いに注意を喚起している一節である。「車遮：爺有衙，也有雅，夜有亚。」とあって、「衙、雅、亚」は家麻韻に属する。これは、当時日常の言語生活の場で、自然な発話において「爺、也、夜」の発音が「衙、雅、亚」と同じになってしまうことが起こりえたことを我々に伝えている。これも、上で述べた「也」と「呀」が取り替え可能であったことの証となるであろう。「呀」は元代に初めて出現した字であり、当時の発音上の必要から産み出されたものである。この字が記録しているのは、当時の語気助詞の実際の発音である。しかもこの発音は語気助詞「也」から変化したものなのである。今日の方言にも「也」を「ya」もしくは「a」の音で発音するものがある(劉勳寧1985)。旧来の文字形式「也」を用いて記録された語気助詞の発音は依然として語気助詞本来のものであったのである。しかし、当時「也」からはすでに「呀」の音の語気助詞が分化しており、読書人は自覚すると否とに拘わらず「呀」を語気助詞とする用字法を採用し始めていた。その後、語気助詞「也」の本来の正音法は次第に失われてゆき、この字で語気助詞を表記するのは実際の言語感覚に全く合致しなくなったのである。したがって、元代の後、「也」の用例は益々減少し、新たな正音法に対応するものとして「呀」と「啊」が主役の位置に浮上したのであり、「也」の語気助詞としての地位を奪い取ったのである。しかし、その表記するところ

の語気助詞そのものは変わらなかったのである。喩えて言うならば、「也」と「呀」、「啊」は同一人物であり、「也」と「呀」、「啊」は読書人がこの人物に着せてあげた異なった衣服である。人は背広を着ても、カジュアルな服をきてても、和服を着ても、どんな服をきてても変わらず同一人物であり続けるのである。

現在の北京方言で使われ続けている「呀」と「啊」とは、歴史上の「也」の直接の後裔だと言えよう。

### 3.3.2 「也」の継続的使用法の変遷

中原官話では、清代以降、「也」の辿った道筋は北京話とは異なる。それは消滅せず、引き続き使われ続けたのである。蒲松齡(1640～1715)の『聊齋俚曲集』ではその使用頻度は極めて高い。『聊齋俚曲集』に収録されている諸作品は、その言語が極めて平易であり、庶民の実際の日常的な言葉を映し出している。「也」の用例を見てみよう。

(82) 張老唾啞出来，説：“餓死我也！”（牆頭記）

(83) 丑云：“説起来你不信，如今就現有一个哩。你看那不是怕老婆的他達来也？”（禳妒咒）

(84) 公子走来走去，説：“天還沒打一更，春夜這樣寒冷，一宿怎樣捱的！這好苦也！”（禳妒咒）

(85) 公子上，長嘆介：“咳！我好苦也！只愛他俊模俊樣，誰知人面獸心。”（禳妒咒）

(86) 公子上：“呀，那事決撒了也！……适才樊子正来，必然説破机关。爺娘呼喚，必然要受气也！”（禳妒咒）

(87) 呀，春香俊了也！這不是衣服？你拿了去穿上，去那穿衣服鏡前照照你自家，看看俊也不俊？（禳妒咒）

(88) 秀才喘吁吁的說道：“如今院中簽票已到，要拿做呈子的人。想是天明就有差人到了，你也該犯个打算。我待去也。”（磨難曲）

なぜ彼の作品においては「也」が消滅しなかったのであろうか。それは、語気助詞「也」と「也」字の発音が全く同じであったゆえに語気助詞の正字法としても何ら差し支えなく使いつづけることができたというのがもっとも妥当な解釈であろう。ただし、『聊齋俚曲集』には「也」と全く同じ意味の「呀」も用いられつづけている。これは何を意味するのであろうか。位層言語学の観点から言うならば、「也」、「呀」は「也」の位層を表しているのである。劉勳寧が位層言語学の分析法に基づくと、馬韻三等の「也」の字音はie/ɛ(劉勳寧

2003)で、これは基層に属するものであり、「呀」は新たなia/aという字音で、新たな層に属する。現在の淄博方言もこれと同様な状態にある。そこで、以下のように示すことができよう。

位層 I = ia/a : 呀

位層 II = ie/ε : 也

今日の山東方言における「也」の状況はどうであろうか。以下に記述してみる。

#### 4. 平邑方言における「也」

平邑県は山東省南部に位置し、平邑方言は中原官話に属するものである。平邑方言では、副詞「也」の音声形式は[ie<sup>3</sup>]あるいは[ie<sup>53</sup>]であり(例文省略)、語気助詞「也」の音声形式は[ie<sup>3</sup>]あるいは[ε<sup>3</sup>]である。それぞれ2種の音声形式はいずれも自由変種である。「也」の使用法は近代漢語白話の「也」と完全に一致している。例を見てみよう。

(89) 這個地方，前不着村后不着店也，上哪里找麼吃去？

[tʃə<sup>412</sup> kə<sup>3</sup> ti<sup>412-53</sup> fəi<sup>3</sup>, tɕ<sup>h</sup>ian<sup>53</sup> pu<sup>214-44</sup> tʃə<sup>53</sup> tɕ<sup>h</sup>yən<sup>214</sup> xəu<sup>412</sup> pu<sup>214-44</sup> tʃə<sup>53</sup>  
tian<sup>412-53</sup> ie<sup>3/ε<sup>3</sup></sup>, ʃən<sup>412</sup> na<sup>44-214</sup> li<sup>3</sup> tʃə<sup>44</sup> me<sup>53</sup> tʃ<sup>h</sup>ɿ<sup>214-412</sup> tɕ<sup>h</sup>i<sup>3</sup>]

これは『老乞大』の用法のコピーのようなものである。平邑方言の「也」は、その用法や意味が近代漢語白話のものと完全に一致している。「也」は伝事語気、伝問語気、伝疑語気のセンテンスに用いられうる。以下に若干その記述と分析を試みよう。

##### 4.1 伝事語気文における「也」

伝事語気文における「也」は、聴き手に向けて新たな事柄もしくは事件を伝える語気を強調する働きをもつ。呼称の直後に置かれた場合、強烈な呼びかけを表現する。例文を見てみよう。

「也」が呼称の直後に置かれた場合：

(90) 娘也！你出来。

(91) 小四也！你快点去打瓶子酱油子去。

(92) 村長也！您可得講点良心。

(93) 老天爺也！快下场雨吧，庄稼都旱死了。

「也」が新たな事柄の伝達を強調する場合：

- (94) 他是外国人也！  
 (95) 清起来<sub>早晨</sub>凉快，咱早走也！  
 (96) 咱这里没有，上北京买去也！  
 (97) 炖牛肉<sub>用</sub>高压锅炖，闷上盖，一霎就熟也！  
 (98) 天冷也！恁暖和暖和再去。  
 (99) 水少也！添行[xaŋ<sup>3</sup>]上点。

「也」が新たな事件の伝達を強調する場合：

- (100) 他夜里<sub>昨天</sub>走了也！  
 (101) A:将<sub>刚纔</sub>烙的饼，你尝尝。  
       B:我吃饭了也！不吃了。  
 (102) 恁達達<sub>父親</sub>赶集买肉去了也！  
 (103) 天冷了也！恁暖和暖和再去。  
 (104) 水少了也！添行[xaŋ<sup>3</sup>]上点。  
 (105) 他還沒起<sub>起床</sub>也！  
 (106) 肉還沒熟也！

ここで特に指摘しなければならないのは、新たな事件の伝達を強調するこの類のセンテンスにおいて「也」の前に実現を表す「了」が有る必要がある(否定文は除く)ということである。「了也」が結合した場合、2種類の音声的实现方法がある。丁寧に発音するときは[lo<sup>3</sup>ie<sup>3</sup>/ε<sup>3</sup>]と言い、気を抜いて発音するときは[ε<sup>3</sup>]と言って1つの音節に融合される。

さらに注意すべきは、例(98)、(99)および(103)、(104)で、「也」を含む文にはいずれも形容詞があるが、この2組はその表す意味は同じではないことである。(98)と(99)は、差し当たって了解している性質もしくは状態を強調しており、それに先だって了解していた内容とは一切関係ないのである。それに対して、(15)と(16)は、すでに了解していた性質もしくは状態から現在への変化を強調しているのである。例えば、水餃子を茹でている、鍋のふたを開け「水少也」と言う場合、もともと鍋にどのくらい水が有ったのかを知っているわけではなく、この時に水が足りないことに気づいたのである。もし「水少了也」と言ったならば、もともと鍋の水は充分有ったことは分かっていたのだが、しばらく茹でたあと蒸発によって水が足りなくなってしまったのであり、現在了解するものは、それに先立って了解していたものが対比の基礎となっている。

## 4.2 伝問語気文における「也」

この類のセンテンスにおいては、「也」を用いることによって質問の語気が強化される。例を見てみよう。

- (107) 他是哪里人也？
- (108) 你吃麼也？
- (109) 你買多少也？
- (110) 你上哪去了也？
- (111) 我去了，那里怎没人也？
- (112) 你是誰也？
- (113) 走半天了，還沒到。還有多遠也？

## 4.3 伝疑語気文における「也」

伝疑語気を表す場合、「也」を用いると発話者が立証されることに疑いを抱いていることが強調される。例えば、

- (114) 你是山東人也？
- (115) 她趕明兒家走也？

選択疑問文に用いられる場合、主な形式は「X也不X」、「X也沒X」もしくは「X不X也」、「X沒X也」である。とりあえず「不」を含む例のみを挙げてみよう。

- (116) 你看也不看？
- (117) 咱買豬也不買？
- (118) 我的臉上黑也不黑？

すでに述べたように、この種の形式は実際には2つのセンテンスから成っている。平邑方言では、丁寧し発音するとき、この種の形式の「也」はしっかりと音声化される。しかし、気を抜いて発音するときは、「也」は脱落し「X不X」と音声化される。このこともこの種の形式が実際には「X不X」の原形であることの証左となろう。さらに、疑問を表す「X不X」から、「也」の痕跡を見出すことすらできるのである。すなわち、最初の「X」中の最後の音節に見られる変調形式にその痕跡が留められており、軽声音節「也」が条件となった変調と考えられるのである(孟子敏2000)。例えば、例(116)や(117)は、「也」が脱落した後の疑問を表すこの種の形式なのである。

- (119) 你看[k<sup>h</sup>an<sup>412-53</sup>]不看？
- (120) 咱買豬[pfu<sup>214-412</sup>]不買？

もし「X不X」がショートフレーズとして文中の文成分となる場合には、そ

のような変調現象は見られない。例えば、

(121) 你白管我看不看[k<sup>h</sup>an<sup>412</sup> pu<sup>3</sup> k<sup>h</sup>an<sup>412</sup>], 你看就是了。

とりわけ興味深いのは、「X也不X」の「也」が脱落した後、「X不X」は伝疑語気を表すこととなることである。そしてこのような伝疑語気を強調しようとするときは、またしても「X不X」の後に「也」が添えられうるのである。例(122)、(123)および(124)はその例と言えよう。

(122) 你看不看也？

(123) 咱買猪不買也？

(124) 我的臉上黑不黑也？

#### 4.4 平邑方言における「也」と「呀」

平邑方言の語気助詞にはさらに「呀」があり、音声形式は[ia<sup>3</sup>]あるいは[a<sup>3</sup>]であり、その用法および機能は「也」と同様である。位層言語学の観点からするならば、「呀」は新しい形式であり、「也」と同一の語であるが、「也」とは音韻形式の位層を異にするものであるということとなる。両者の関係は以下の如く示すことができよう。

位層 I = ia/a : 呀

位層 II = ie/ε : 也

#### 参考文献

- 太田辰夫 1958『中国語歴史文法』, 江南書院, 東京。  
 佐藤晴彦 2002『日本『老乞大』の中国語史における価値』, 『中国語学』, 249号, 東京。  
 孫錫信 1999『近代漢語語気詞』, 語文出版社, 北京。  
 竹越孝 2002「从『老乞大』的修訂来看句尾助詞“了”的形成過程」, 『中国語学』, 249号, 東京。  
 孟子敏 2000『平邑話の変調—兼論變調の類型』, 『中国語学研究・開篇』, Vol.20, 東京。  
 孟子敏 2003『センテンス末尾の語気助詞“也”の変遷』, 日本中国語学会五十三回全国大会予稿集, 東京。  
 孟子敏 2005『句末語気助詞“也”の意義及其流变』, 『語言教学与研究』, 第3期, 北京。  
 劉勳寧 1985『現代漢語句尾“了”的来源』, 『方言』, 第2期, 北京。  
 劉勳寧 1990『現代漢語句尾“了”的語法意义及其与詞尾“了”的聯係』, 『世界漢語教学』, 第2期, 北京。  
 劉勳寧 2003『文白異讀与語音層次』, 『語言教学与研究』, 第2期, 北京。  
 羅驥 1994『北宋句尾語气詞“也”研究』, 『古漢語研究』, 第3期, 長沙。

(本論文は松山大学2005年度特別研究助成の成果である。)